



科学と 神秘



川崎ゆきお

「科学的方法と、オカルト的方法の違いは何でしょうか」

「オカルトとは神秘主義のことかね」

「はい、そんな感じです」

「まあ、世の中というか、この宇宙は神秘そのものなのだから、神秘主義でもいいのではないかな」

「その違いは何でしょうか」

「何の」

「だから科学と、そのインチキ臭い方法との違いです」

「どちらも方便かもしれんなあ。使い心地の違いだろう。長く使っていると信じてしまうもの」

「今は科学を信じている人が多いでしょ」

「まあ、信じ切れるのはいいことじゃ。信じられるうちが花かもしれんおう」

「師匠は、科学を信じておられないのですか」

「科学信仰とはよく言ったものだね」

「そうですねえ。信仰じゃありませんから、科学は」

「君は神秘主義に興味があるのかね」

「はい、不思議なことに興味があります」

「不思議か」

「はい」

「森羅万象全て不思議かもしれんからなあ」

「そうなんです。これは決して信仰ではありませんが、科学的な方法とは別のルートがあるような気がするのです」

「それは昔からあったが、今は減ったのう」

「それらのマニュアルはないのですか」

「魔導書のことかな」

「はい、師匠ならご存じではないかと思ひまして」

「それらは、既に世に出ておるので、魔導書というほどのものではない」

「既にもう民間に知られていると」

「ただ、それらは迷信として終わっておるがな」

「やはり、神秘主義はインチキだったのですか」

「そうではないが、使い方の問題だろうなあ」

「では、正しい神秘主義の方法はないのですか」

「それは万人には当てはまらん。個人的なことではないかな」

「やはり、無理ですねえ。だから、科学的方法が採用されるんですね」

「誰がやっても同じ事が得られるのが科学。神秘的な方法は個人にしか当てはまらん」

「分かりました」

「それで納得出来たのかな」

「納得出来ませんが、私なりの方法を考えてみます」

「それがよい。万人に当てはめる必要はない」

「はい」

了